

< 研究室紹介 >

正倉院に保存科学実験室を整備するにあたって

正倉院事務所保存課調査室 永嶋正春

正倉院宝物、それは大きく二つに分けることができる。その一つは、天平時代に光明皇太后が東大寺大仏に献納せられた宝物類と、これに準ずるものであり、もう一つは、平安時代の中頃に、東大寺福智院の倉庫から正倉院の宝庫へ移されてきた東大寺の什器類である。これら正倉院宝物は、現在では東西二つの鉄筋コンクリート製新宝庫に納められ、人工的な温湿度環境下に保存されている。千二百年余を巨大な校倉造宝庫にすごしてきた宝物も“大気汚染の増加”という保存環境の悪化にはかなわなかったのである。

世界にも類例のない、このすぐれた一大古文化財を、現在あるいは将来の人々の活用に供するために、より良い状態でよりながく保存してゆく責務を負っている我々としては、でき得る限りの科学的手段を用いてこの任にそわねばならない。宝物にとっていかなる温湿度条件が最適か。その条件の設定のためにはどうすべきか。大気汚染物質の宝物への影響はどうか。その影響を除去するにはどうしたらよいか。宝物に対する光線の影響はどの程度のものか。修理、展示、写真撮影等の光源をどのように選ぶか。虫害、黴害などの生物的被害をいかに防いでゆくか。宝物修理に合成樹脂等の新材料をどのように応用してゆくか。など、基礎実験、応用実験の必要な多くの課題をかかえている。さらには、当時の材質、技法を科学的に究明することによって、技術史上にあらたな知見を加え、もって現代の諸技術にそれを反映してゆくことも望まれる。これは宝物模造とも関連する重要な研究テーマと思われる。

正倉院においては、その宝物の世界性のごとく保存科学上の諸問題も集約されている。これらの諸問題の研究、解決をはかるために、正倉院の保存科学実験室はこれから整備充実させていかなければならない。正倉院において保存科学を担当することになったものとして、本誌上を借りて今後の御指導、御鞭撻を御願ひ申し上げる。